

6：中医学から

戴 昭宇

NPO 法人日中健康科学会

中国現在の医事制度では、中医学・西洋医学ならびに両者の併用と統合を目指した中西医结合医学という3つの医療体系が並存しています。中医学と中西医结合医学のいずれも正規医療だとみられ、中国の日常的診療と保健活動で広く応用されています。

また、5世紀頃から日本に伝来しはじめた中医学は、江戸時代の中期まで長い間、日本医療の主体を担ってきたとも言えます。今日の漢方医学は、すなわち中医学を土台として日本化してきたものです。

医史文献学の研究から、メタボリックシンドロームを含め、様々な「贅沢病」「食原病」にみられた生活習慣病の急増は、最近からの始めてのことではなく、江戸期の「元禄バブル」ともいわれた時代でも、日本の社会的問題となったことがあるのは分かります。食生活の豊富化と乱れが出たその時代、前記の病態と診療に中医学的研究を行った医家がいまして、日本で中医養生学の内容を始めて集大成させた『養生訓』（貝原益軒）の登場も、同じく背景であったとみられています。

1977年に発表された『マクガバンレポート』は、アメリカ現代栄養学のスタートラインだと高く評価されています。その中、西洋医学の限界を直視し、ますます多発となった癌や循環器疾患などの退治策を提起しました。特に最も理想的な健康食は、なんと元禄時代以前の日本の食事、伝統的な日本人の食事との結論を、我々はいまも吟味すべきです。

様々な生活習慣病に対しては、メタボリックシンドロームという「未病」の段階から、医食同源（薬食同源）と心身一元論の理念を重視した中医学を活用し、歴史的な視点の考察と統合医療的なアプローチをも大変大事だと、ここに改めて強調いたしたいです。